

2020年8月2日

小さな信仰

今日の第一朗読・イザヤ預言の冒頭では「渴きを覚えている者は皆、水のところに来るがよい」（イザ55・1）、飢えと渴きを感じているすべての人へ力強いメッセージが呼びかけられています。どのように歩めば、わたしたちの「魂はその豊かさを楽しむこと」（イザ55・2）ができるようになるのでしょうか。「パン増加の奇跡」をとおして黙想いたしましょう。

洗礼者ヨハネが殉教したという知らせを受けたイエスさまは「ひとり人里離れたところ」（マタ14・13）に退<しりぞ>かれます。イエスさまは、人生に新しい局面や転換が生じた際には度々、弟子たちや群衆から離れて、ひとり寂しい場所に退かれます。それでも群衆たちはその後を追いかけていきます。そこで「夕暮れ」（マタ14・15）が訪れ、群衆と弟子たちは食べる物もなく、途方に暮れてしまうという場面です。

「ここは人里離れた所で、もう時間もたちました。群衆を解散させてください。そうすれば、自分で村へ食べ物を買に行くでしょう。」（マタ14・15）

弟子たちも、自分たちなりに必死で知恵を絞って出した提案のようにも見えません。

よもや断られるとは想像もできなかつたにちがいありません。「行かせることはない。あなたがたが彼らに食べる物を与えなさい」（マタ14・16）という厳しい指示に対して、弟子たちは動揺を隠すことができず、すかさず反論しています。

「ここにはパン五つと魚二匹しかありません」（マタ14・17）。荒れ野で夜が近づき、立ち往生する弟子たちと群衆は一体どうになってしまうのか。今日の福音の中心的なメッセージは、この危機的な場面で示される次のみことばにあるように思われます。

「それをここに持ってきなさい」（マタ14・18）

弟子たちのまなざしから見れば、何の役にも立たないごくわずかな「パン五つと魚二匹」をイエスさまの前に差し出したとき、それまでとは全く異なる状況が訪れます。「すべての人が食べて満腹した」（マタ14・20）。この「パン増加の奇跡」を読み解くために、第二朗読の聖パウロのことばが助けになるでしょう。

「〔皆さん、〕だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難<かんなん>か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。しかしこれらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を取っています。」（ロマ8・35、37）

弟子たちと群衆は深刻な欠乏状態にあります。物質的にも霊的にも生活必需品が不足しているというのが聖書に登場する人間の姿と言えます。しかしわずかではありますが、「パン五つと魚二匹」を持っています。今、持っているわずかなものをイエスさまの前におささげいたしましょう。わたしたちの飢えと渇き、不安や苦しみ、そして「小さな信仰」、どんなにつまらないものに映ったとしてもイエスさまは「それをここに持って来なさい」（マタ14・18）といつくしみ深く招いてくださいます。その声に耳を傾けると「生きているすべてのものの願いを、神は豊かに満たされる」（詩編145）という詩編作者の祈りを、きっとわたしたちもより身近なものとして受け止めることができるでしょう。

「わたしはいのちのパンである。
わたしのもとに来る人は飢えることがなく、
わたしを信じる人は渇くことがない。」
（ヨハネ6・35）

カトリック立川教会 主任司祭
東京教区 ヨゼフ 門間 直輝

●年間第18主日聖書朗読箇所：

- ① イザヤ55・1-3
—答唱詩編—詩編145より
- ② ロマ書8・35、37-39
- ③ マタイ14・13-21